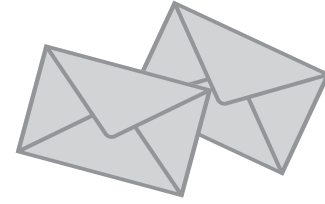


支部だより (各支部からの報告)

鶴友会
つつじ会

東海支部
筑紫支部

関東支部
関西支部



関東支部



「ミレニアム」新世紀は内外とも激動の一年でした。支部も新体制での船出となりました。支部の紹介を支部の近況と、全国大会の応援・観戦記として報告いたします。

一、【支部の近況】第十九回支部同窓会（十月十九日）は校長代理広瀬教頭、同窓会からは安藤会長・郡田・本村副会長・鬼塚理事、重本関西支部長・江崎東海支部長・井本有信会東京支部長の御来席を賜り、五年間連続「私学会館」で開催、盛會裏に終了しました。



関東支部のみなさん 第十九回 記念写真

支部長は田中恒徳支部長（二回生）で、支部の運営は「三役会」で指針事項の検討『役員会』での審議等を行い運営を図っています。この間「フェイス・トゥ・フェイス」顔を合わせ会話をすることを重視しています。役員は月に一回は集まることとし、同窓生の触れ合いと連帯感の醸成を狙いにしています。恒例の観戦会・家族旅行・新年会等は好評でしたので新年度も計画します。

平成十四年は支部発足二十周年にあたり節目の年となるため、同窓生各位の御指導御鞭撻のもと、役員会員ともに知恵を出し合って対処してまいります。

関東の同窓生「キンシャイ 待つとるバイ」

二、【応援・観戦記】東京体育館にて第32回全国高等学校選抜優勝大会「ウインターカップ」（バスケットの試合）。

準決勝は土浦日大と対戦。前半は47対46



バスケット部 ウインターカップ準優勝

の1点差で気を持たせたが、自力に優る大濠が10対85で快勝。喜びもひとしおでした。優勝戦は能代工業（秋田）と78対90で惜敗、残念の感を深くしました。

準決勝では前半の接戦について、バスケットOBの言を借りれば「日大は最高の状態、大濠は実力があり基礎もできているので大丈夫」とのこと、後半は安心して応援出来ました。

決勝は前半は54対68 後半は開始後一桁の5点差まで追い上げ、勝利に期待をもちました。後半は実力伯仲の試合でした。しかし、能代工業のエースの、より遠い所からのスリーポイントが所々に決まり、誠に残念な試合結果となりました。

当日（28日）夜半のTVで再観戦。会場での観戦と異なる点は、能代の応援に比べ、大濠の応援にひと工夫はしかった、との印象



ウインターカップ、試合の一幕(東京体育館)

東海支部



第7回東海支部総会を平成13年11月7日に今津教頭先生にもご来名いただき18名の出席者のもと、盛大に開催されました。児玉幹事の指揮による校歌斉唱で終了するまでのおよそ2時間、笑顔が絶えることなく無事終了しました。

東海支部では今後この総会の時の勢いに乗って会の若返りと、月1回の定例会を継続し、東海在住の大濠OBの多数参加を目指すしていきたいと思えます。

「質実剛健」という大濠魂は世代を超越した共通認識であると感じております。我々の心の根底には、この「大濠魂」が深く根付いていると思えます。大濠で培った「魂」を心に、東海支部共々、一歩一歩着実に成長して行きます。

（文責 事務局 齊）

関西支部



関西支部は、あの森山良二投手を擁して学校創立30年目に甲子園初出場を果たしたときのスタンドでの応援の仲間が原点でした。そして早や21周年を迎えて、現在では会員数も五〇〇余人となりました。今でも初出場初勝利の感激で、皆で泣きながら校歌を歌ったことなどが走馬灯のように思い出されます。年一回の総会を挟んで忘年会・新年会そして家族同伴の花見会・紅葉狩りなどを行なっておりますが、例にもれずマ



関西支部のみなさん (於 テルモトレ大阪)



「寒風なにするものぞ」新年会 (於 桜橋百番)

平成13年10月の筑紫支部総会では、今後の支部運営と役員改選についての話し合いを行いました。

まず、会員が気軽に総会に参加できるようにイベント等を催し、会の若返りを図るため、幅広い年齢層を集めて活気ある支部を作っていくということになりました。

それに伴い、新しい支部長に松本健吾氏（41年卒）を推薦致しました。新支部長のもと、2002年度から新たな支部運営に力を入れてまいります。そのため、1月の理事会で新役員を選出し、3月の理事会で新役員の紹介と引継ぎを行う運びとなりました。

筑紫支部



ンネリ化の傾向がみえ、メンバーも殆ど変わりなく、しかもジリ貧の状態です。人は若い時は仕事に恋に、結婚すればどうしても家庭に目を奪われます。しかしながら定年を控え人生の黄昏時を迎えた時、友達が、故郷が、懐しく感じられます。その時の為にも私達は「継続は力なり」をモットーに少人数でもいい、細く長く、「そこに行けば博多がある」という同窓会にしたいと思っております。最近若い人のアイデアで8月にビアパーティーを行なっておりますが、願わくば若い人の積極的な参加で支部の活性化を期待せずにはいられません。

副支部長 後藤一夫（九回）

さて、私の支部長生活を振り返ってみて、最も心に残っていることは、役員と一緒に中国大連の外国語学院を訪れ、先生と一緒にテーブルを囲んで交流をもてたことです。以来、交流関係は続いています。また、10年の月日を一区切りとして、支部長時代に書いた本が文芸社より出版されるに至り（2002年1月）、深い思い出になりました。

私も長い間支部長を務めながら、何の貢献もできずにまいりました。今後の支部活動には、側面からの協力を惜みずまずにやっつけていこうと決心しております。

支部の会員の皆様にも、新支部長への協力とより一層のご参加とご協力をお願い致します。

稗田邦雄